

論述重点

注 意

1. 監督者の合図があるまでは、問題冊子と解答用紙を開かないでください。
2. 解答はすべて解答用紙の決められた箇所に記入してください。
3. 試験開始後、解答用紙に氏名・受験番号を記入してください。
4. 試験問題は、この冊子の1～16ページに記載されています。問題冊子の余白は、メモとして使用して構いません。
5. 試験終了後、この問題冊子と下書き用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、後の「文章読解・論述問題」に答えなさい。

信じてはいけないものの代表？

「うわさを信じちゃいけないよ」という歌があったように、一般的にうわさはあてにならないものであり、信じてはいけないものの代表だとされる。実際、熊本地震の際に広まったライオン脱走のうわさや、新型コロナウイルスが発生した当初に広まったトイレットペーパー品薄のうわさが引き起こした騒ぎは記憶に新しいところだろう。

そしてこのような事例は古今東西、まいきよにいとまがない。戦前のアメリカでラジオドラマを発端とし、新聞報道が加速させた「火星人来襲」はよくうわさの例として挙げられる。日本でいえば、電車内で女子高生グループが交わした「信用金庫って危ないんじゃないの（強盗に襲われるから）」という冗談から最終的に取りつけ騒ぎにまで発展した豊川信用金庫事件なども有名である。

このような事例を並べていくと、確かにうわさは信じてはいけないもののように思われてくる。しかし、本当にそうなのだろうか。

もうひとつ考えてみたい問題がある。それは、うわさの伝達媒体の違いである。先ほど例に挙げた古典的な事例では、うわさは人々の口コミやラジオや新聞を通じて広まっていた。それに対して、ライオン脱走のうわさは、^②しがいを歩くライオンの写真とともに投稿されたツイッター（現在は「X」）に投稿され、リツイート（再投稿）を通じて^③瞬く間に拡散していった。トイレットペーパーが品薄だという情報が広まったのは最初はSNSからだったが、その後のマスコミ報道が（SNSの情報はデマだと否定するものであったにもかかわらず）品薄状態を加速させて、元の間違った情報が結果として事実になってしまったという少々複雑な事例であった。では、うわさを伝える媒体の違いは、うわさを信じてよいかどうかという問題に何か違いをもたらすのだろうか。

うわさとは何か

「うわさ」という日本語には、間違った情報というネガティブな響きが含まれているかもしれない。しかし、ここではまずうわさを「真偽

がまだ確定していないもの」と捉えておきたい。というのも「間違った情報を信じてはいけない」ことは自明のように思われるので、偽であるという意味を含ませてしまうと「うわさは信じてよいものか」という問いがそもそも成り立たなくなってしまうからである。以下、間違った情報については「デマ」という言葉を使うことにしたい。つまりこの用法に従うと、「うわさ」は偽であることが判明した時点で「デマ」であったことになる（「デマゴギー (demagogy)」には「民衆を煽動するために政治的な意図で流される」という意味が含まれているが、ここでは政治的で意図的なものに限定しない意味で「デマ」という語を用いていく）。

うわさに関する先行研究としては、G・W・オルポートによる社会心理学の研究が有名である。彼はL・ポストマンとの共著『うわさの心理学 (The Psychology of Rumor)』(邦訳のタイトルでは『デマの心理学』と訳されているが、先に挙げた理由でここではこう訳出した)の序文で、「うわさ (rumor)」を次のように定義している。

うわさとは、特定の事柄について（あるいは時事的な事柄について）信じるように提案されるものであり、人から人へと伝達されるものであり、普通は口伝えによるものであり、確かな証拠の基準が存在していないものである。(Allport & Postman 1947, p. ix 引 用者訳)

ここで「確かな証拠の基準が存在していない」とあるのは、先ほど述べた「真偽がまだ確定していない」という特徴とほぼ同じである。また「普通は口伝えによるもの」とあるが、現在われわれが生きる時代のうわさはオルポートの時代とは異なり、口伝えで広まることばかりが普通とはいき切れなくなっている。したがって現代のうわさを定義するのであれば、ここに新たに「ネットを通じたものであり」という伝え方（「ネット伝え」）を付け加える必要があるかもしれない。

社会学者の松田美佐は、うわさを政府の公式発表やマスメディアのような制度的な情報チャネルを通じてるふする情報と対比し、「人から人へとパーソナルな関係性を通じて広まる情報」と特徴づけている（松田 2014）。そのうえで、現在うわさを伝える媒体のひとつとなっているインターネットを経由する情報が、マスメディアの情報とも、友人から直接聞く話とも異なっていることから、「パーソナルな関

係性を通じて」という定義があいまいになっている現状を指摘している。ここではこの松田の指摘を踏まえたうえで、先ほどのオルポートの定義に出てきた「人から人へと伝達されるもの」を、さまざまな人間関係を包含した、もっとも広い意味で捉えておきたい。

ここで焦点を当てたいのは自分の経験や知識を他者に直接伝えるタイプの情報ではなく、多くの人々をあいだに挟んで伝わっていくタイプの情報である。この規定を加えてここで考えたいうわさを定義しておくならば、「多くの人があいだに入って、人から人へと伝達される、真偽がまだ確定していない情報」となる。

オルポートの実験

うわさを信じてはいけな思考えたる研究として、先のオルポートの実験をみてみることにしよう。

まず、最初に選ばれた被験者の一人が部屋のスクリーンに映し出された絵を見る。そしてその内容を、絵を見ていない別のメンバーに口頭で伝えるよう指示される。その際には二〇項目の内容を含まなければならない。それを聞いたメンバーは、伝えられた内容をできる限り忠実に別のメンバーに伝えていく。このような伝言のやりとりを繰り返していくと、伝えられる内容はどのように変化していくのだろうか。

その結果、多くの人によって伝言が繰り返されると、伝達の過程でうわさが短くなったり、単純化されたり、より平易になったりする平準化 (leveling) と、伝達する人が事前にもっている心理状態に合わせて情報内容が変容していく同化 (assimilation) の傾向が現われることがわかった。平準化に関しては、絵の内容や伝達の状況を変えて実験したところ、五、六人を介するとおよそ七〇パーセントの要素が元々の情報からふるい落とされてしまうことが示された。同化をてんけいてきに表す例としては、先入見への同化が挙げられる。たとえば、電車内で白人と黒人が口論している絵の内容を伝える実験では、かみそりをもっているのは白人であるが、黒人がかみそりをもっているという記述が数多く現われた。さらに、そのかみそりで黒人が白人を脅していると記述されたこともあった。ここには黒人に対する先入見、予期、恐怖、憎悪など当時の被験者があらかじめもっていたであろうさまざまな心理状態が影響を与えており、見たり聞いたりした情報がその人の心理状態に同化させられている。そしてこのような同化はほとんどの場合、意識的に行われているものではない。それゆえ、情報を歪めていることを本人が気づかないまま、内容が改変されていく。

認知的な歪み

オルポートの研究は、人によって伝えられる情報伝達の特徴を改めて浮きぼりにしてくれる。

物を媒介する例として少々古めかしいが、録音テープを対比させて考えてみよう。録音テープの場合、ひとつのテープから別のテープに録音しなおすと、ノイズが入ったり、音を拾いきれなかったりして、わずかではあるが元の音声とは異なったものとなる。そして、その音の差違は録音を繰り返せば繰り返すほど増大し、最初の音とは異なったものとなっていく。人が人に口頭で伝達していく場合も同様に、情報が多くの人を経由すればするほど、人間の記憶力や再現能力の限界ゆえにその正確さが失われる。この点に關していえば〈物〉を媒介とした伝達と〈人〉を媒介とした伝達は似ている。

しかし、大きく異なる点もある。オルポートの実験が示しているのは、人を媒介とする伝達の場合には情報内容を一変させてしまうようなフィルターがかかっているということである。われわれ人間はある特定の見方や考え方のもとで情報を受け取るが、それは先入見や感情といった人間固有の性質によって大きな影響を受ける。たとえせいじつに発話されていたとしても、そして記憶力が問題なく發揮されていたとしても、伝えられていく情報が正しさから遠ざかっていく人間の認知メカニズムが存在するのである。このような認知的な歪みは多くの人を經由すればするほどより大きくなり、情報はより不正確になる。したがって、人々の口から口へと伝えられるうわさは、やはりあてにならない、信じてはいけないと言いたくなる。しかし、本当にそうだろうか。

うわさは信じてもよい（コーディイの反論）

うわさを信じてもよいと考えるようになる議論の代表として、哲学者のコーディイの議論を紹介してみたい。彼は『いま何を信じるべきか―現代の問題への認識論の応用』のなかで、「うわさを信じてはいけない」という一見、常識とも思われる見解に反論しつつある（Coady, D. 2012）。コーディイによれば、オルポートが行った実験室での状況とわれわれがうわさを聞く実際の状況は異なっており、実験のきけつをそのまま日常生活にあてはめることはできない。そこで強調されるのは、実際の状況では聞き手がそのうわさの正しさについて判断できる可能性である。

第一の違いは、事前知識の有無である。オルポートの実験では、絵を見ることができるとは最初の一人だけであった。それゆえ、その後

伝達する人にとっては、自分に伝えられた情報がすべてであった。それに対して、通常われわれが耳にするうわさはまったく未知のものではない。少なくとも話題になっている事柄について、事前知識がある程度もっている。

たとえば、ある人についてのうわさが聞こえてきたとする。その場合、その人について普通は何かを知っているだろう。まったく知らない人物は、そもそもうわさの対象にならないだろうからである。したがって、事前知識をもとに、その人物に関するうわさが真実でありうるか、あるとしたらどの程度ありうるのか等々をある程度は判断できる。同様に、ある地域で事件や事故が起こったといううわさがあった場合でも、その地域についての事前知識や常識をもとに、どのくらいありえそうかを判断することは可能であろう。まずはこの点が、通常のうわさとオルポートの実験との違いとなっている。

第二の違いは、うわさを伝え合う人間同士の関係性である。オルポートの実験では、見知らぬ人たちが同士がそのただに集められていた。それに対して日常的なうわさの場合は、お互いによく知っている人同士の個人的な関係性を通じて広まっていくことが多い。それゆえ、その人が正直な人か、いい加減な人か、おつちよこちよいな人か、思い込みが激しい人か……、人となりは事前にわかっているから、この事前知識をもとに、うわさが信頼できるかどうかを評価することができる。つまり、「何を聞いたのか」だけでなく、「誰から聞いたのか」という観点からもうわさの信頼性を評価することができる。ここでの「誰から」には、直接自分に情報を伝えた人だけでなく、うわさの情報源となった人も含まれ、もしも情報源がわかる場合には、その人物についての知識をもとにうわさを信頼してよいか考えることもできる。

第三の違いは、うわさの伝え方である。オルポートの実験では、聞いたことをできるだけ忠実に再現することが求められており、すべての被験者が断定表現で情報を伝えていた。それに対して、通常のうわさの場合には、その情報を伝える際に情報の確証度を表す言葉が付け加えられることが多い。たとえば、冒頭で紹介した豊川信金事件でいえば、うわさの初期段階では「あの信用金庫は危ないらしい」と、「らしい」という推量を表す表現がつけられていた。しかしそのうわさが伝わっていく過程でこの表現がとれて、最後には「危ない」という断定調になって伝わり、人々の混乱を招くことになった。このような断定を避ける表現としては、「らしい」以外にも「本当かどうかはわからないけど」「あくまでも聞いた話だけ」等々の表現が挙げられる。

われわれはこれらの表現をもとに、その情報がどの程度確からしいのかを判断することができる。たとえば、「本当かどうかはわからない

けど」という言葉とともに伝えられた情報は、断定調で伝えられた情報に比べて、確からしさを割り引いて受け入れるべきものとなるだろう。もちろん、ここでの確証度は伝え手がその情報をどう判断しているのかを示すものにすぎず、それが実際の確からしさといっち^⑦ちしているとは限らない。しかしそれでも現実のうわさに関しては、聞き手がこれらの表現の違いを手がかりとして、その情報をどの程度真剣に受け取るべきかを判断することはできる。

第四の違いは、おそらくもっとも重要なポイントとなる。オルポートの実験では、その絵を直接見た人物、すなわち情報源となる人物は一人しかおらず、聞き手にとっては、その人から伝えられる情報ルート以外に情報を得るルートが存在していなかった。それゆえ、その情報の正しさを自分が伝えられた情報以外の何かに訴えて確かめることはできなかった。

それに対して実際のうわさの場合には、異なる情報源にあたつてその信頼性を確認できる。そして、複数の情報源にあたつて同じ情報が確認できれば、うわさの信頼性は高まるし、そうでなければそれはうわさの域を出ないことになる。しかしここで気をつけなければいけないのは、これは単に複数の情報ではなく、複数の情報源にあたつた場合にいえることだという点である。

たとえば、ある事件の目撃者はAさん一人で、それがBさん、Cさん、Dさんと伝わっていったとしよう。ここでもしもBさん、Cさん、Dさんがオルポートの実験のように伝え聞いたことをそのまま次の人に伝えていたならば、私がAさんと同じ情報をBさん、Cさん、Dさんと、複数の人から伝え聞いたとしても、そのうわさの信頼性が高まるわけではない。

間違つたうわさが広まったケースとしてよく知られている火星人襲来にせよ、豊川信金事件にせよ、ひとつの情報源から発した情報が多くの人に伝えられた結果広まっていたものが多い。そしてうわさが広く拡散してしまつた後となつては、元々の情報源がひとつだったことも覆い隠され、あたかも多くの人の証言によつてその情報が裏づけられているとさ^⑧つかくしてしまつた人も多かつたのだろう。そしてこのような誤情報の連鎖を止めたのは、マスメディアにせよ、けいさつ^⑨等の公的機関による公式発表にせよ、うわさの元となつた情報源とは異なる情報源から伝えられた情報であつた。このように複数の情報源にあたつてみることで、通常のうわさの聞き手はオルポートの実験の場合とは異なる立場になることになる。

判断を保留する意味

ここまでみてきたように、通常のうわさは、伝えられた内容以外にその信頼性を判断するためのさまざまな根拠をもつことができる。つまり、うわさを伝える人は、単に右から左へと情報を受け流す存在でもなければ、歪みの発生源でもなく、自分で手にした根拠をもとにその情報の正しさを自分自身で判断できる知的に自律した主体でありうる。

そしてその自律性は、自分が聞いたうわさを信じるかどうかだけでなく、そのうわさを他人に伝えるかどうかに関しても発揮されうる。つまり、オルポートの実験状況と違い、われわれはうわさの信頼性が低いと判断した場合や、正しいかどうか判断できない場合に、その情報を「伝えない」という判断をすることができる。古代ギリシアのピュロン派の懐疑主義は、ある主張をそのまま受け入れるのではなく、かといってその主張をすぐに否定してしまうのでもなく、いったん正誤の判断を保留すること（エポケー）が重要だと考えた（セクストス・エンペイリコス 1998）。うわさについても嘘か本当かをすぐにどちらかに決めたくなくなるが、いったん判断を保留したうえで、誰にも伝えないという判断をすることは、フェイクなうわさの拡散を防止する意味でも大切なこととなる。

さらにコーデイは指摘していないが、聞き手が伝え手に対して質問できることも実験との重要な違いである。われわれのうわさの伝達は、伝言ゲームとは異なり、不明瞭なところや納得できないところについて相手に尋ねることができる。そしてこのような自発的な質問を経て、疑問点を払拭できたならば、他人に伝えるかもしれない。あるいはそれでも疑問点が残るのであれば、自分のところで留める判断をするかもしれない。このとき、うわさを媒介する人は知的な自律性を発揮しているといえる。

ここまでみてきたことを逆向きに捉えれば、あるうわさが伝わってきたという事実は、そのうわさがこれらの判断のフィルターを潜り抜け、生き残ってきた情報であることを示している。したがって、先ほど、うわさの定義に組み込んだ「多くの人があいだに入る」という特徴は、必ずしもオルポートのいうように情報を不正確にするとは限らないし、人間というフィルターも情報を歪める方向にのみ働くわけではない。うわさが広まっていく過程は、オルポートの実験のような受動的な伝え手によって担われるだけではなく、知的に自律した伝え手が情報を批判的に吟味しながら媒介しうる。その過程を通じて情報の不足や不備が補われ、正確さがより増していくこともありうる。したがって、多くの人があいだに入るという事実はうわさを信頼できないものにするのではなく、むしろうわさの信頼性を増すものだと考えることもでき

る。

ネット上のうわさは信じてよいのか

では、ネット上のうわさはどうかであろうか。SNS上で広まった「ライオン脱走」や「トイレットペーパー品薄」などのうわさの媒介者は、知的な自律性を発揮する余地はあったのだろうか。

まず、リアル社会ではうわさの拡散の範囲は限定されている。それは、近しい人間関係を経由して伝わっていくからであり、うわさを伝える行為そのものに一定の時間がかかるので、そもそも短時間に広範囲に伝えることが不可能だからでもある。

一方、インターネットはまさにその不可能を可能にした。しかしその結果として、その情報が届く人たちが多様になった。日常生活では、趣味の話であれ、学校の話であれ、学問の話であれ、同じ話題に興味をもち、ある程度同じ知識を共有しているメンバーで会話のグループが形成されることが多い。それに対して、ネット空間は従来であれば交わることのないグループに属する人たちが一堂に会する場を提供した。このような状態は「文脈の崩壊 (context collapse)」と呼ばれ、文脈を共有しない者同士のコミュニケーションにさまざまな認識的な問題が生じることが指摘されている (Frost-Arnold 2023)。そのひとつが、前提知識が共有されていないことである。あるうわさについて、その分野や地域についてある程度知っている人であれば否定できても、そうでなければ、真実のように思えてしまうことがありうる。また、前提知識が共有されていないがゆえに、そこで伝えられている言葉の意味を誤解して受け取ってしまうこともありうる。

このようにうわさの内容を理解し、判断する文脈が共有されないネット空間では、うわさの主題についての事前知識をもっているという第一の論点が成り立たないことが多い。

うわさを伝え合う人間同士の関係性については、ネット空間でさらに大きな違いが出てくる。というのも、ネット上のうわさはよく知らない人同士のあいだで広まっていくという点に大きな特徴があるからである。もちろん、ネット上でも公開範囲を知人に限定できるが、必ずしもそうなっているわけではない。そして、不特定多数に公開される情報は、その情報の発信者、伝達者、受信者が互いに知らない間柄であることが多い。それゆえ、情報の確からしさを発信者や伝達者に関する事前知識から判断するという方法が使えない。

リアル社会におけるうわさの場合は、職場の同僚であれ、学校の友人であれ、そのうわさの伝達に携わった人たちをある程度推定することもできるだろう。したがって、その人たちがどの程度信頼できる情報の伝え手か、どの程度知的な自律性を発揮しているかを検討して、うわさの信頼性の有無を評価できる。たとえば、大学や職場で友人から聞くうわさはほとんど信じる人であっても、情報の真偽にあまり関心がないうわさ大好きグループから伝わってきたと知ったならば、信頼性を低く見積もることはあるだろう。ネット上のうわさは伝達者の顔が見えず、不透明になっていることも多いがゆえに、このような方法で情報の確からしさを評価するのが難しくなっている。

「うわさの伝え方の違いをもとに判断できる」というポイントはどうか。例外はあるが、ネット上の情報が「本当かどうかはわからないけど」という留保をつけて伝えられることは少ないように思われる。

その理由としてまず考えられるのは、ネット特有の表現の制約の問題である。とりわけSNSやX（旧ツイッター）で文字数の制限がある場合は、情報をできるだけ切り詰めて伝える必要がある。それゆえ、確証度を表す留保表現などは真っ先に省略されることになる。

あるいは、もう少し積極的な理由も考えられる。いわゆる「釣りタイトル」などの例でもわかるように、ネットに情報をあげる人には、読み手にできるだけインパクトを与えて、多くの人に自分の情報をみてもらいたいという欲求が存在していることがある。さらに、ネット空間では、情報の真偽や質よりも人々の関心や注目を集めたほうが広告収益などにつながる、いわゆる「アテンション・エコノミー」^⑩が成立している。したがって、留保をつければ人々の注目度を弱めてしまうと考えて、留保表現は意図的に使わずだんげんが目立つようになる。

「異なる情報源に由来する情報ルートが存在する」ことはどうか。この問題は二つのケースに分けて考えることができる。ひとつは、ネット上の情報の正しさをネット以外の情報ルートを通じて確かめるケース、もうひとつはネット上で別の情報と照らし合わせて確かめるケースである。

前者は、現実のうわさとそれほど大きな違いが生じないだろう。問題は後者である。たとえば、あるネット上のうわさの真偽を確かめようとして、キーワードで検索してみたところ、同じような内容の書き込みがたくさん見つかった。このことは、そのうわさの信憑性を高めることになるだろうか。それは、先ほどみた情報源と伝達ルートによる。もしもたくさんのサイトで同じ情報を伝えていたとしても、その元をたどればひとつの情報源に行き着き、同じ情報がただ繰り返されていたとすれば、同じ発信をしている人の数の多さはその内容の信

信頼性を高めてくれない。とりわけネット上では、画面上のデータを別の場所へ複製するいわゆる「コピー＆ペースト」やさまざまな情報をSNSのフォロワーと共有できる再投稿（re-posting）などによって、同一の情報源からの情報が大量に拡散している場合が多い。

ただ逆にいえば、元の情報がそのままのかたちで保存されて伝えられることになるので、リアル社会のうわさよりも情報源を特定しやすい側面もある。したがって、多数の発信に埋もれている情報源にまで遡って、本当に複数の情報源が伝えているものなのかを（その情報源が信頼できるかどうかも含めて）確認する必要がある。

ワンクリックで伝わる功と罪

最後のポイント「情報を伝えるかどうかを伝え手が判断できる」という点に関してはどうか。おそらくここにも、身の回りで伝えられるうわさとの違いは存在している。たとえば同僚や先輩についてのうわさを別の誰かに伝える場合には、自分が改めてその内容を言葉にして発話する必要があり、それなりに時間と労力がかかる。そして、うわさを聞く相手にもそれを聞くあいだの時間と労力をとらせることになる。現実のうわさにかかるこのようなコストは、実はけっこう重要である。それは、そのコストをかけてまでその情報を伝えるべきか考える余地が生まれ、そこまで重要でなかったり、信憑性が低かったりするうわさであれば、「わざわざ伝えなくてもいいか」となるからである。さらに、その情報を伝える相手がすぐ近くにいないことも多いので、これまでみてきたような仕方ではうわさの信憑性を吟味する時間的余裕もある。通常のうわさの場合は、これらの要素が情報の吟味を動機づけている。

それに対して、先ほどみたSNS上の再投稿はクリックひとつでできるので、ほとんど労力も時間もかからない。このような「コスパ（コストパフォーマンス）」や「タイパ（タイムパフォーマンス）」のよさは、わざわざ伝えるべき情報であるかどうかを吟味する動機を失わせる。また、その情報に触れてからクリックして投稿するまでの時間もきわめて短い。それゆえ、その情報の信頼性を吟味することが難しく、立ち止まって考え、その結果として「伝えない」という判断も生じにくい。

もちろんこのような即時性と手軽さは、災害が発生したときには、さまざまな有用な情報が瞬時に拡散されるなど数多くのメリットがある。加えて、情報内容に手を加えない再投稿は、オルポートのいう平準化や同化を免れて元の情報をそのまま伝達できるというメリットがあ

るともいえる。しかしその裏返しとして、これらの要素はその情報を伝えるべきかどうかの判断が十分なされない要因にもなっている。ネット上のうわさの伝達者は、情報フィルターの役割を果たしていない場合が多いと思われるが、それは必ずしも本人にのみ責任があるわけではなく、リアル社会のうわさとは異なるネット上の情報共有の仕組みが、知的な自律性を発揮しにくい状況をつくりだしてしまっている側面もある。

再投稿における保証

ここで少し、ネットにおける再投稿に固有の責任とリスクの問題についても検討しておきたい。

「証言の保証説」と呼ばれる立場では、証言を保証の一種とみなして、証言の責任を、証言した情報の正しさを保証したことに対する責任として捉える。たとえば、春美さんが私に「外は寒いよ」と言っているとき、彼女は単に外の気温についての情報を伝達しているだけではなく、その情報の正しさを私に請け合い、保証 (assure) していることになる (Moran 2006)。だからこそ私が春美さんの発言を信じ厚着をして外に出てみたのにぜんぜん寒くなかった場合に、「外はちっとも寒くないじゃないか」と春美さんを責めるのである。この点で、春美さんは自分の証言に責任を負っている。

しかしネット上の証言の場合には、このような証言の責任が不明確になる場合がある。そのひとつが、やはり再投稿の場合である。再投稿では、それがどのような意図でなされているのがその再投稿をみただけではわからない。そもそもその発信者が再投稿された内容を支持しているのかさえもわからない。この点はしばしば法的な観点（たとえば、名誉毀損等の不法行為となりうるのかどうか）からも問題となるが、仮に再投稿者は内容を支持するつもりがなくても、それを受け取る側は通常の証言と同様にその情報の正しさを保証していると捉えることが多い。このような発信者と受信者の認識のずれを踏まえて、R・リニは再投稿を「歪んだ証言 (bent testimony)」と呼んでいる (Rini 2017)。

リアル社会のうわさの場合では、春美さんの発言を聞いた私が秋子さんに「外は寒いんだってよ」と伝えた場合、春美さんだけでなく、私も証言の責任を免れることはできないだろう。それは私の証言もまた、秋子さんに対してその情報の正しさを保証していることになるからで

ある。しかし、歪んだ証言である再投稿の場合には、同じことがいえるかどうか分からない。この問題は、他人の証言を再投稿する場合だけでなく、Google 検索の結果や ChatGPT の回答をシェアする場合にも生じうるし、言語によらない画像やイラスト、映像だけのショート動画などをシェアする場合にも生じうる。したがってこのような歪んだ証言に関しては、現状では受け手が通常の証言と同様に扱う可能性を想定する必要があるし、その情報の正しさを保証する意図がないのであれば、そのことは明示すべきである。

情報源の信頼性に対するリスク

再投稿に関するもうひとつの問題として、S・ライトは再投稿がもたらす認識的リスクを指摘している (Wright 2021)。一般的に参照先を伴う証言には、二つのリスクがある。たとえば、私が知人に「ニューヨーク・タイムズで大統領がまた失言したのを読んだよ」と言う場合、その発言によって私が「大統領がまた失言した」ことを真だと思っていることが伝えられるだけでなく、私がニューヨーク・タイムズを信頼できる情報源だと思っていることも暗示的に伝えられることになる。したがって、受け手に誤った信念をもたらすリスクだけでなく、その情報源の信頼性について誤った信念をもたらすリスクも存在することになる。

この情報をSNSで再投稿する場合、ニューヨーク・タイムズ (のアカウント) が投稿した「大統領また失言」という記事を自分のアカウントで再表示することになるので、参照先の提示と伝達内容が一体となって示される。しかも、その参照先へはクリックひとつでアクセスできる状態になる。その結果、通常の会話以上に、聞き手がその情報源から情報を入手する機会を増やすことになり、情報源の信頼性についてのリスクもまた増大する。たとえば、ある再投稿で示された情報源がフェイクニュースを頻発する〇〇研究所というサイトだったとすると、再投稿の内容を正しいと信じた人はその情報源も信頼できると思ってアクセスしてしまい、そこでさらに多くの誤った信念を植えつけられることになる。うわさを伝える際に、情報内容が偽であるリスクを意識している人でも、情報源の信頼性に対して誤った信念を形成するリスクまで意識することは少ないかもしれない。しかし、とりわけネット上で再投稿をする場合には、こちらのリスクにも気を配る必要がある。

以上みてきたように、コーデイが挙げたうわさの信憑性を判断するための根拠は、ネット上のうわさに関しては成り立たないところが多々ある。そしてその違いは、情報を伝える人々が知的な自律性を発揮するのを困難にする要因にもなっており、ネット上のうわさに関しては情

報伝達過程で伝え手によるフィルタリングが十分なされていない場合も多い。

もちろんその可能性はリアル社会のうわさにもありうるし、逆にネット上のうわさであったとしても、信頼が置ける人たちを通じて伝えられているのであれば、フィルタリングが十分に機能していると考えてよい場合はある。したがってうわさの評価をする際には、情報源を特定してその信頼性を評価するだけでなく、その情報がどういう人々を媒介して伝わってきたのかを特定し、そこでその人たちはどれくらい知的自律性が発揮できていそうかを見極める必要がある。

（山田圭一『フェイクニュースを哲学する―何を信じるべきか』（岩波新書、2024年）より抜粋。一部改変）

※ 本文中、オルポートの実験の説明において、実験当時、黒人に対して差別的とも取りうる先入見が持たれていたことが描写されています。これは、先入見等が情報の認識に影響するかどうかを検討する文脈での記述であることから、原文そのままの表記としましたが、特定の人種に対する差別を許容・助長する意図はありません。

文章読解・論述問題

次の問一～問九に答えなさい。

問一 文中の傍線①～⑩にあてはまる漢字を解答欄に記入しなさい。

問二 文中の傍線①～⑩についてよみがなを解答欄に記入しなさい。

問三 本文の内容と合致しないものを、次の選択肢(あ)～(お)の中から一つ選んで、その記号を解答欄に書きなさい。

(あ) オルポートの実験では情報源となる人物が最初の一人だけだったが、リアル社会では複数の異なる情報源にあたって情報の信頼性を判断できる。

(い) オルポートの実験では最初の一人から伝えられた情報しかなかったが、リアル社会ではうわさに関する事前知識をある程度持っていることが多いので、それをもとに情報の信頼性を判断できる。

(う) オルポートの実験では互いに見知らぬ人同士が情報を伝達したが、リアル社会では知り合い同士でうわさを広げることが多いので、こういう人物から聞いたかで情報の信頼性を判断できる。

(え) オルポートの実験では情報が一方的に伝達されただけが、リアル社会では聞き手が伝え手に対して質問することで、情報の信頼性を判断できる。

(お) オルポートの実験では情報がその確からしさとともに伝えられたが、リアル社会では情報が推量を表す表現とともに伝えられるので、その表現を判断基準として情報の信頼性を判断できる。

問四 本文の内容と合致しないものを、次の選択肢(あ)～(か)の中から二つ選んで、その記号を解答欄に書きなさい。

(あ) リアル社会のうわさは近しい人間関係を経由するので拡散する範囲が限られるのに対し、ネット上のうわさは従来であれば交わることのない範囲にまで共有されることがある。

(い) リアル社会のうわさは伝える側がその内容につき伝達する際に時間と労力をかけることになるのに対し、ネット上のうわさはワンクリックで伝達することが可能なので、情報の信頼性を吟味することが難しい。

(う) リアル社会のうわさについては周囲の人々の言うことを鵜呑みにしてしまう傾向が強いのにに対し、ネット上のうわさについては誤った情報が多いことから鵜呑みにしないように警戒しがちである。

(え) リアル社会のうわさは伝達に携わった人たちをある程度推定することが可能であるが、ネット上のうわさは不特定多数にも公開されることがあるためによく知らない人同士に広まっていくこともある。

(お) リアル社会のうわさは複数の異なる情報源にあたっていくことが可能であるが、ネット上のうわさは元をたどると一つの情報源がただ繰り返されていることがあり得る。

(か) リアル社会のうわさは必ず留保をつけて伝達されるのに対し、ネット上のうわさはSNSの性質として留保表現を使えないという特質がある。

問五 筆者が、オルポートとポストマン共著の書籍“*The Psychology of Rumor*”の訳として、邦訳本のタイトルである『デマの心理学』ではなく、『うわさの心理学』という訳で紹介した理由を150字程度で説明しなさい。

問六 伝言が繰り返されると情報の内容が変容するのはなぜか。オルポートの実験に言及しながら150字程度で説明しなさい。

問七 筆者が述べている「知的な自律性」とは何か。100字以内で説明しなさい。

問八 筆者はSNSでの再投稿に生ずる固有の責任とリスクの問題について指摘している。それはどういうものか。200字以内で説明しなさい。

問九 ネット上のうわさの信頼性をどのように判断すべきか。身近な例を挙げながら、本文の内容を参考にして、あなたの考えを500字以内で述べなさい。